24、往還二廻向

法然上人は、「南無阿弥陀仏より南無阿弥陀仏たまはりて　南無阿弥陀仏になるが嬉しさに南無阿弥陀仏称へ喜び申し候」と仰せられてあるが、南無阿弥陀仏に導かれ、南無阿弥陀仏と一体になり、南無阿弥陀仏を説きに来るのだ。権智より実智に帰し、実智より権智に顕れて活躍さして頂くのだ。畢竟行くも還るも南無阿弥陀仏だ。南無阿弥陀仏は智慧と慈悲、智慧有るが故に生死にとどまらず、慈悲有るが故に涅槃に住せず、何時も活躍しているのだ。此の真理を覚証したのを阿弥陀仏と言い、その智慧を人格化したのを勢至菩薩と言い、その慈悲の側を人格化したのを観音菩薩と言う。釈尊の弟子の智慧の表現者を文殊菩薩と言い、慈悲の表現者を普賢菩薩と言う。三人寄れば文殊の知恵と言って、二人なら妥協して欲に傾き易いけれども三人ならば牽制しあって

割り方無我の空慧になるものである。「慈悲の眼に憎しと思ふ人ぞなき、罪ある身こそ尚哀れなれ」の歌の如く、智慧は動いて慈悲となり、慈悲は動いて実行となり、救済となり、普き行に賢しの活動となるのである。これを動物によって表現した時、文殊は獅子に跨り、普賢は巨象に乗る。大智を獲る者は怖畏する事なく奮進の勢いで真理に向って猛進する。大慈悲の極致を究むる者は涅槃に安住する事なく、巨象の漫歩するが如く煩悩の稠林を教化するのである。

往相廻向とは往生浄土の相状、還相廻向とは還来穢国の相状、正信偈には

得至蓮華蔵世界　即証真如法性身
遊煩悩林現神通　入生死園示応化

と言い、又

報土因果顕誓願　往還廻向由他力

と言い、肉体より言えば、苦悩の娑婆を去って浄土に還るを往相の廻向と言い、安養浄土より娑婆世界に来たるを　還相の廻向と言ってるけれども、信念の上より言えば

信受本願前念命終の開発までが往相の廻向であり、信後の活躍は常行大悲の益で還相の廻向である。もう一歩を進めて邪見憍慢の法龍をたしなめ導き反省さす順縁、悪口言ったり排斥したり、攻撃したり、苦しめたりする逆縁悉くが、正しく生きよ猛進せよと檄発して下さる還相廻向の大士と拝めるのだ。

光明無量の智慧は　獅子奮迅の往相廻向の作用となり、寿命無量の慈悲は　巨象漫歩の還相廻向の作用となり、南無阿弥陀仏の賜によって　往還二廻向の活躍となるのである。